

## 東アジアと同時代日本文学フォーラム

巖, 基権

九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1495363>

---

出版情報 : 九大日文. 23, pp.114-117, 2014-03-31. 九州大学日本語文学会  
バージョン :  
権利関係 :



◎イベント・レポユ―

# 東アジアと同時代日本文学フ ォーラム

INOC  
基 権

二〇一三年一〇月一七日から一九日の三日間にわたって、韓国の高麗大学の日本研究センターにて〈東アジアと同時代日本文学フォーラム〉第一回大会が開催された。これは「日本の近代文学を東アジアの観点から再構築」し、「開かれた連帯としての東アジアにおける疎通を促す」ことを目的として開かれたものである（<http://eastasianmodernlit.web.fc2.com>）。半年または一年ごと、東アジア各国・地域を巡回しながら開催される予定で、今回はその創立大会として韓国の高麗大学で開かれることになった。

三日間開かれたフォーラムには二七人の発表者と一二人の討論者が集まり、「東アジアと日本文学」について熱い議論がなされた。一日目の一七日には日本・中国・韓国・台湾の院生たちの「次世代フォーラム」が開かれた。同じ時間帯に二つのセッションに分れて、筆者はセッション2の「東アジアの日本語媒体と文学」で、「京城日報」における「大衆小説」の成立と変遷」という題目で発表を行った。他にも同じ会場で三人の興

味深い発表があったが、その中でも印象に残ったのは中村静代氏の「在朝日本人雑誌『朝鮮公論』における〈怪談〉の研究」であった。『朝鮮公論』は一九一三年に朝鮮で創刊（一九四四年廃刊）され、朝鮮では『朝鮮及満洲』（一九二〇―一九四二年）と共に長期間にわたって発行された総合雑誌である。中村氏は朝鮮公論社の記者の松本与一郎が書いた「春宵怪談京城の丑満刻」という作品に注目し、「在京城日本人」が政治的な「暗黙の了解」により「被植民者」を「消去」しながら、自分たちのアイデンティティを維持していったと論じた。筆者の研究対象である「京城日報」にも怪談に関する記事やイベントについての情報が多数散見される。「総督府植民地政策を補佐する」雑誌であった『朝鮮公論』の読者が毎日のように接する新聞というメディアから得る情報と併せて作品を読む時、どのような作用（読み）の可能性があるのか考えさせられた。

二日目と三日目にはメインの「東アジアにおける日本語雑誌と植民地文学」というテーマのもと全四部の時間割で研究発表が行われた。それぞれの部のタイトルは「第一部 東アジアにおける日本語雑誌の流通」、「第二部 越境する東アジア文芸の諸相」、「第三部 植民地における日本語文学」、「第四部 東アジアにおける日本語雑誌と植民地文学」である。筆者の興味に沿って各部で印象に残った発表の内容をいくつか簡単に紹介したい。

二日目の最初の発表は、厳仁卿氏（高麗大学）の「朝鮮半島における日本伝統詩歌（短歌・俳句・川柳）雑誌と日本文学」

で、植民地朝鮮における在朝日本人たちの文壇は微弱なものであったというこれまでの先行研究に真つ向から取り組んだ発表であった。一九二〇年代以後朝鮮で数多く創刊された短誌、俳誌、柳誌といった詩歌雑誌を緻密に調査し、朝鮮半島で行われた「日本語文学」の全体像を明らかにするための一つの試みである。また、印象深かったのは同じ第一部で日比嘉高氏（名古屋大学）が外地朝鮮の「日本語書店」に注目し、それを「遭遇、流通、集蔵」という三点から分析したことであった。今までは「出版社」に関する研究に重点が置かれており、その末端であった小売書店はあまり注目されてこなかったと述べながら、「本に出会う場であり、人に出会う場である」小売書店に関する研究の面白さと重要性を強調した。また、この際大事なことは日本人からの視点だけではなく、韓国側からの視点も合わせ持つことであると指摘した。

第一部から活発な議論がなされたため、予定した時間を少し超えて昼食の時間になった。他の大学から参加した院生たちとの刺激的な会話であつたという間に昼休みが終わり、第二部と第三部に突入した。

第二部で尹大石氏（ソウル大学）の「京城帝国大学の文芸活動と在朝日本文学」という発表は、今大会の筆者の発表とも関連があり、大変興味深かった。「在朝日本人意識」の形成に焦点を当て、京城帝国大学の学生たちの文芸活動に注目し、それが後の戦時下の朝鮮における朝鮮文人と在朝日本文人たちが唱えた「内鮮一体」の場を先取りしていた」と意味づけた。

会場の外が暗くなる夕方まで続いた第三部では、金季杵氏と中根隆行氏の発表が特に印象的だった。

金季杵氏（高麗大学）は一九二〇年代の朝鮮で発行された雑誌、特に『朝鮮及満州』と『朝鮮公論』を取り上げながら、そこで執筆活動をしていた朝鮮人による日本語創作を分析した。その理由として、朝鮮での日本語文学は「越境するというより、混在している帝国と植民地との相を呈している」点、帝国のメディアに対する「朝鮮人の欲望が読み取れる」点、最後に先行研究の貧弱さを挙げている。朝鮮で発行された日本語雑誌に寄せられた物語について、朝鮮人と在朝日本人が同居している空間であり、両者の間に差別的な構造はあっても、「植民地当時における日常は、当事者たちの物語のなかでは混在して表れていた」と結論付けた。

二日目最後の発表は中根隆行氏（愛媛大学）の「異郷への仮託——朝鮮俳句と郷土色の力学——」であった。戦時下朝鮮で発行された俳誌『水碓』（一九四一年七月創刊）の創刊号の綱領に朝鮮俳句の自己規定の不在を指摘しながら話が進められた。特に、一九二〇年代後半から一九三〇年代前半の朝鮮俳壇の全盛期に遡って、「朝鮮郷土色——地方色、固有色——」に関する議論がどのような傾向性を持つて展開されてきたのかを論じ、帝国日本の中で地方文学としての朝鮮俳句の自己規定のむずかしさを指摘した。午前中の嚴仁卿氏の発表とも重なる内容も多く、異なる視点を同時に照射する際の緊張感と面白さを感じた。

最後の三日目も早朝から行われ、主催大学の鄭炳浩氏（高麗

大学の「20世紀初期(1900-1920)朝鮮半島における日本語雑誌の変容と日本語文学」を皮切りに第四部が始まった。氏は「国中心の国文学研究の伝統・キャノン(正典)中心の文学の位階性・閉鎖性の踏襲」の問題を提起した上、未だに「韓半島植民地(日本語文学)の全体像が不明」であることを指摘した。特に二〇〇〇年代以後活発になった韓国における日本語文学研究の中で、一九〇〇年から一九二〇年までの日本語文学の状況について当時刊行された日本語雑誌の文芸からその特徴などを分析した。今回のフォーラムの趣旨を改めて再確認させられるような発表であった。

今回のフォーラムに参加して、東アジアの各国または地域における植民地文学研究が更に緊密な関係性の中で再構築されつつあることを肌で感じた。一方的な視角だけではなく、研究者同士の間による総合的な研究の重要性を改めて認識させられた。植民地文学研究はまさに帝国の小売書店のように「複数言語、複数民族の接点領域として書かれねばならない」。

そのためにも、今回のような大会の開催と共に、その情報の発信が大事であると思う。そういう意味で前記の「東アジアと同時代フォーラム」のホームページが更に活発な情報発信(または受信)の拠点になることを期待してやまない。また、「フォーラムを通して得た成果は日本語・中国語・韓国語で公開」するとあり、今後の活動が楽しみである。

最後に今まで紹介した内容も含めてフォーラムで行われた発表の題目を全て記しておく。

## 【一日目】《セクション1. 東アジアにおける日本語文学》

●李芸蓁(名古屋大学)「台湾における日本語文学戦後―雑誌『台湾文学』の翻訳を例として」

●祝然(北京師範大学)「戦争末期の『北窓』―『掌篇猷納小説』を中心に」

●金旭(高麗大学)「兪ジンオの日本語文学と植民地朝鮮の表象」

●魏晨(名古屋大学)「児童文化の場としての満鉄社員誌『協和』―児童文学者石森延男を中心に」

●金宝賢(高麗大学)「外地における俳句研究」  
《セクション2. 東アジアの日本語媒体と文学》

●嚴基權(九州大学)「『京城日報』における『大衆小説』の成立と変遷」

●国蕊(北京師範大学)「陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察」

●中村静代(高麗大学)「在朝日本人雑誌『朝鮮公論』における〈怪談〉の研究」

●游書昱(輔仁大学)「吉行淳之介『鞆の中身』試論」

## 【二日目】《第一部 東アジアにおける日本語雑誌の流通》

●嚴仁卿(高麗大学)「朝鮮半島における日本伝統詩歌(短歌・俳句・川柳)雑誌と日本語文学」

●単援朝(崇城大学)「雑誌『芸文』の成立と変遷―『文化総合雑誌』から『純芸文総合雑誌』へ」

●横道啓子(輔仁大学)「植民地台湾における近代思想の受容―

『台湾青年』を中心に」

●日比嘉高(名古屋大学)「戦前外地の書物流通(1)―朝鮮半島における日本語書店の展開」

## 《第二部 越境する東アジア文芸の諸相》

●波瀾剛(九州大学)「崔承喜とジョセフィン・ベイカーをめぐる表象―日本、朝鮮、満洲 1935-1936」

●林涛(北京師範大学)「日本女性作家と『満洲浪漫』―横田文子「白日の書」に見た「浪漫」

●呉佩珍(台湾政治大学)「日本、台湾における北白川宮の表象をめぐる―1895年-1945年を中心に」

●尹大石(ソウル大学)「京城帝国大学の文芸活動と在朝日本人文学」

## 《第三部 植民地における日本文学》

●金季杼(高麗大学)「植民地朝鮮の日本語文学場で競う創作主体―1920年代の雑誌を中心に」

●王志松(北京師範大学)「翻訳小説と「満洲文学の特質」―雑誌『満洲浪漫』を中心として」

●林雪星(東呉大学)「坂口零子の作品に描かれた台湾人表象―

「鄭一家」と「時計草」を中心に」

●中根隆行(愛媛大学)「異郷への仮託―朝鮮俳句と郷土色の力学」

## 【三日目】《第四部 東アジアにおける日本語雑誌と植民地文学》

●鄭炳浩(高麗大学)「20世紀初期(1900-1920) 朝鮮半島における日本語雑誌の変容と日本語文学」

●劉春英(東北師範大学)「中国東北地方における日抛時期の日本語雑誌の言説空間―文学創作を中心として」

●Dongyoun Hwang(Saka University of America)「Contact Zones in Colonial Space, Publications, and Transnationalism」

●呉亦昕(中正大学)「文芸雑誌『台湾文芸』(台湾文芸連盟)／1930年代)における日本文学」

●和泉司(慶応義塾大学)「在台2世と植民地日本語雑誌―新垣宏一の文学活動とそのテクスト」

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)